

使役で一番良いことは米つきでした。戦友と談合して米をカッパラって満腹になるまで食うため、生命の危険を感じながら内地送還の一日も早いことを待ちました。異国中国の流斯橋の山中で俘虜の身の厳しさと、敗戦の厳しさを味わったわけでありませぬ。

翌二一年五月帰還命令ができました。実に十か月の間、並々ならぬ辛苦を味わい、涙を飲み、激励し合いながら、ただひたすらに祖国への帰還を念じていました。

これで中国の抑留生活も終始符を打つことができました。九江から乗船、揚子江を下り南京上陸、無蓋貨車で上海へ。昭和二十一年六月八日、無事博多へ上陸復員しました。今もって共に戦った幾多の戦友とともに、陣没英霊の記憶が脳裡に刻み込まれ、我々は生涯忘れることはないでしょう。

今後とも戦争など起こらぬことを祈願し、永遠の平和への願いを子々孫々まで語り継ぐことを念願してやみませぬ。

## 南支の戦闘

福岡県 松添 久

私は昭和十七年二月十日、小倉の連隊に潮兵団補充要員として集結し、南支那へ行った。現役ですから召集ではない。私は五男に生まれ、長男は杭州湾で戦死しました。長男は当時、大村で二十一海軍航空廠、大村海軍航空隊、大村連隊等への物資輸送を行う運送業をやっておりましたが、長男が戦死後は、私が十六歳から一家の大黒柱として働いていました。

徴兵検査は第一乙種ということで小倉連隊に入営しました。四男がビルマで龍兵団の中隊長をしていたが、十九年十一月二日に戦死、三男は現地満期しましたが、当時内地に帰りますとすぐ召集が待っておりますので、久留米の騎兵連隊に入営、北満警備から、満州国の鉄道警護隊に入りました。次男は小さいときに亡くなり、五男の私が一家を支えていましたが、入営により運送業を捨

てました。

家族は年老いた父親と妹一人が留守を守っておりまして。そういうことで家族のことが一番気にかかっておりました。運送業でかなりの収益をあげておりましたが、これを投げ捨てて軍務に服しました。

支那大陸の南支那の油頭の上陸、一〇里奥の潮州で教育を受けましたが、初めは初年兵の訓練でしたが、まだ一期の検閲が終わらないうちに支那軍と戦闘を交え、初めて突撃して支那兵を刺殺しました。その後討伐と警備の繰り返しで一年余を過ごしました。

十八年六月、兵団長が中村閣下に替わり、独立歩兵第十九旅団、すなわち潮兵団がそれです。中村閣下になりましたとたん、今まで防備ばかりだった我が軍は攻勢に転じ、我が軍も敵の拠点を夜襲で攻撃する作戦となり、戦死者も相当でました。

六月に始まり九月には敵の一個師団が攻めてきまして、我々の中隊の四中隊、三中隊、二中隊の一部、重機教育隊等が囲まれました。敵は一個師団でしたので敵はっかりの所に三日三晩包囲を受けていた。やっと救援の部隊

が来てくれました。それが仲秋作戦で私たちの陣地が二か所玉砕しました。その甲合戦ということで、陣地を奪られた四中隊は、初年兵を連れ決死隊になれということに別れの盃をし、敵陣地に夜襲をかけた。それで一晩中敵から撃ちまくられ、壕の中からも戦死者が出ました。

晩になり、航空機が二機救援してくれ、そのため敵が逃げ出したので、迫撃作戦をいたしました。我々の中隊も大打撃を受け、三中隊、一中隊も打撃を受けたので部隊交代、後方の潮陽という所に下がりました。

この作戦で中隊は半分以下になった。私は給与係りをしています、兵隊の食物の補給、被服の世話をし、少ない給与で賄っていたものです。

転進作戦のため他の部隊へ引継ぎを終わり、転進して行く途中、今まで救援の弾薬や何やかや運んでいた運転手が疲労の余り橋の上からトラックが転落、私だけが川の中でトラックの下敷きになりどこへ行ったか分からないうとき、泥水の中であぶくがブクブク出ていたので助けられました。早速、病院に運ばれ、二週間の入院をしてから第一線の勤務についた。なにしろ半数以下に落ち込

んでいた中隊ですので、警備に付きましても、また中隊本部に残っている者も、陣地同様で、不寝番も毎晩で昼は野菜、米をとりに行き中隊勤務の兵に支給するし、また陣地からも食事を取りに来ますので、それに間にあうよう給与係をやっていたのです。まあ、そういう関係で指揮班にいたので、生命があったのではないかと思いません。

そして、次の陣地を交代しましたら、私の交代した他中隊がまた玉砕する羽目になりました。これは討伐に行くのが事前に洩れていたらしく、敵軍に包囲され、中隊長以下全員が玉砕してしまっただけという事もありました。人員の少ないのがまた少なくなりました。私たちが新しい任地についたら初年兵が来るというので兵営の増築等いろいろ仕事があり、教育の準備、受入れの準備に奔走させられました。

その時分に広東の予備役主計下士官候補者の試験があり、数人受験しましたが私一人が合格になりました。広東にちょうど船便がございましたが、支那の苦力と一緒の船に乗せられました。集合教育を受けたのですが、湘

桂作戦が始まり三か月の教育期間が二か月に短縮されました。

それぞれの原隊に帰れということで、私も潮陽まで帰るということになったが、船便もなければ飛行機もない。一か月以上経っても帰れず、やっと飛行機に乗せてもらい原隊復帰しました。だれも彼も兵隊ではなかなか飛行機に乗せてもらえないのですが、わずか一時間ぐらいで油頭に帰りました。

湘桂作戦が始まっていたので、帰ってすぐ十九年十二月には作戦の援護のため、十二月暮、揭陽という敵の県庁を占領し、さらに追撃して油頭からずーっと北の方まで攻め上り、揭陽県を占領し、その県庁に我々の部隊は一応駐屯することになり、占領地を拡大しました。

二十年二月からまた湘桂作戦の第三期の呼応作戦の形で再び掲陽、普寧、恵来の敵軍を攻めてまいりました。そしてフィリピンが玉砕のあとでしたから、フィリピンからの敵前上陸に備えてパイウス湾から広東、雷州半島を全部含めまして、南支軍を展開したわけです。

そのため、私たちの部隊も普寧を占領していましたが、

そこからさらに広東の方へ陸路二二〇里をテクテク歩き、広州南方のデルタ地帯へ出ました。行っても行ってもクリーク地帯みたいな珠江の流域に展開しました。

そこで鐘馗兵团（第百三十師団）に名前が変わり、先発隊に入れられ、鯨兵团との交代を孫文の生まれた中山県付近で行い、百三十師団の編成を終わったわけです。

それから、マカオの周辺で山の形が変形するほど陣地構築をしまして、比島占領後の敵前上陸に備えていたとき、終戦となりました。

引き揚げてくる時も主計下士官でしたので、船の中ではみなさんの上陸地における復員者へ二〇〇円の支給のため書類作り、経理関係の帳簿整理に追われた。

浦賀へ向かう復員船で病人（腸捻転）が出て、手術用の水を多量に使い、水不足のため急遽、鹿児島に上陸することとなり、三月三十日、鹿児島に着き、長崎に近いと喜ぶ反面、四中隊で浦賀に向かった同年兵は四月四日に復員して恩給が支給され、大隊本部にいた私と同中隊出身三人が恩給欠格者です。

帰りましても、運送店は合併、合併で大きくなり、以

前使っていた者が上司となり使われる身の辛い思いをしました。満州から引き揚げてきた兄たちも養いました。

親から引き継ぎました運送屋は、私一人が最後までやりとげ、停年を迎えました。

## 中支常徳作戦の思い出

静岡県 小林 年 男

私たちの部隊は柄田支隊として、十三軍から一個大隊抜き出されて第十一軍の作戦援護をしたのです。

昭和十八年十月、部隊は急に兵器検査だ、被服検査だ、馬匹検査だとあわただしくなりました。何かあるなど予感がしていたのですけれど「部隊は作戦に向かう部隊の警備地区へ交替して警備につく」と言い渡されました。

私は大隊砲の一番砲手でしたが、軍装検査のとき、靴が痛んでいるので申し出ましたら「これを履いていけ」と、十二文の新品を渡されたのです。大き過ぎて、靴の中で足がガタガタ動くけど、つぎはぎの靴よりましだと思い